

平成 23 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成 ○ 健康な体の子ども ○ よく考えて最後までやりぬく子ども ○ やさしく豊かな心をもつ子ども
--

2 本年度の重点目標

(1) 園運営 (2) 教育研究活動 (3) 他校種との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、教員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。 ・幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーデンカウンセラーのアドバイスも参考に教員間で情報を共有し指導にあたる。 ・園内における「自然とともにある生活」を見直し、幼児の遊びや生活につながる保育の在り方を探る中で、研究テーマ「保育におけるつながりを考える一体験の深まりをめざして」に迫る。 ・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 ・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。
--------------------------------------	--

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
園運営	○組織運営 ・教員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・園務がスムーズに遂行されているかを教員会議や日々の保育情報交換会の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議を踏まえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 ・各教員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、定期的に管理職が個別の面談や指導助言を行った。 ・保護者による「幼稚園教育アンケート」からも、本園の教育や運営に対して、肯定的な評価が得られていた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や保育情報交換会、園内研修等を通して、幼稚園全体として保育の質の高まりや、共に学び高めあう教師集団をめざし取り組んでいきたい。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け、ねらいを明確にし、計画的な環境構成を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に、学年経営及び学級経営の方向性や課題を明らかにし、今年度の保育の方針をたてた。学期ごとに振り返り、達成状況や課題をまとめ、方向性を確認しながら保育に取り組んだ。 ・各週末に学年打ち合わせの時間をもち、保育を振り返り、次週の保育の方向性を確認した。 ・学期ごとの学年・学級経営の振り返りや、行事ごとの振り返りなどの反省や評価を、会議等で検討し、教員相互で保育の質を高める努力をした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教員相互に保育の質を高めていけるよう、個々の保育を開いて語る機会をさらに増やし、他者評価を含めた保育の振り返りを積極的に行う。 ・「週の指導計画」「月の指導計画」をもとに、「年間指導計画」を含めた「教育課程」の再編成につなげる。
	○説明責任 ・日々の保育については降園時の説明及び「学級、学年通信」等で報告し理解を求め、各行事については、取り組みのねらいを明確に知らせ、あわせて事後のアンケートの結果を参考にその成果及び課題を「ふよっこだより」等で公表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「ふよっこだより」を発行し、園で行われる保育の内容や各行事の主旨や取り組み等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。 ・行事後は、保護者にアンケートを依頼し、保護者の意見をふまえ、行事の成果や課題等を「ふよっこだより」で伝えた。 ・「学級・学年通信」を発行し、幼児の遊びや生活の様子を通して、保育のねらい等を伝えてきた。昨年度の課題をふまえ、行事等と関連づけて積極的に発行した。 ・降園時に、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝える時間をもった。保護者に幼児を引き渡す際には、個別にその日の様子を伝えた。 ・保護者による「幼稚園教育アンケート」の結果でも、教育方針を分かりやすく伝え、保護者の願いに応えようとしているとの評価を得た。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程に基づく園の教育方針について、園の保育や幼児の姿を通して保護者により十分な理解が得られるよう、年度当初に限らず、年間を通して説明していく。 ・園の保護者のみならず、広く地域にも園の教育について理解が得られるよう、幼稚園ホームページの活用を検討する。

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 <ul style="list-style-type: none"> ・園運営については、いずれの評価項目においても、自己評価以上のことが実施できている。 ・行事等でも、各クラスの個性が出ており、教員同士が共に学び高め合っている姿勢がうかがえる。 ・年度当初に学年、学級の計画を立て、学期ごとに振り返りを行い、次の学期に生かしている。今後も、行事を行う際の事前、事後の話し合いを継続し、より質の高い保育をめざしてほしい。 ・「ふよっこだより」等で園の教育方針や行事等のねらいや取り組みの過程が詳しく書かれており、よくわかる。一方で情報量が多過ぎると読まない人もいるので、もう少し簡潔してもよいのではないか。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
園運営	<p>○危機管理体制の整備及び施設の拡充</p> <ul style="list-style-type: none"> 「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき年4～5回の避難訓練を実施する。毎月15日実施の「子ども安全の日」における安全教育への意識付け及び施設設備の定期点検とその改善・拡充に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 避難訓練は、不審者対応、火災、地震を想定し、年4回実施、被災時における引き渡し訓練を1回実施した。不審者対応避難訓練は、小学校と合同で実施した。 附属三校園の安全委員会において、「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引」の再検討を行い、改訂版を教員に配付し周知徹底した。 毎月園内遊具等の安全点検を実施し、速やかに施設整備の修理、改善を行った。 養護教諭を中心に怪我や疾病等緊急時の対応リストを作成し、全教員が初期対応を適切にできるようにした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 阪神淡路大震災、東日本大震災等の教訓を生かした避難訓練の実施方法等を再検討し、各教員の危機管理意識や能力の向上に努める。 各学年の幼児の発達段階に応じた安全指導の方法や内容を検討し、より細やかな指導を行う。 月一回の「子ども安全の日」に、避難訓練等を行い、安全教育を充実させたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後も警察官の指導のもと、幼小合同避難訓練（不審者対応）を継続してほしい。また、改善の方策にも記載されているように、月1回、幼児の発達段階を踏まえた避難訓練を取り入れてほしい。
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 本園の特色ある取り組みである「うれしのタイム」のねらいを明確にし、幼児や学級、学年に応じた活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程をもとに、年、月、週の指導計画を作成し、地域の実態や幼児の育ちに応じた、意図的、計画的な保育を行うよう努めた。 各週、各月に反省・評価を重ね、次週、次月の保育につなげ、三年間の幼児の育ちを見通した保育が展開できるようにした。 園行事においては、担当者の計画のもと、行事の主旨や「ねらい」、取り組みの方向について共通理解し、さらに、行事後は振り返りを行い、幼児の育ちにつながる行事のあり方を検討してきた。 今年度は12月実施の「ふよっこカーニバル」において「うれしのタイム」の主旨や幼児の育ちについて教員間で再検討し、保育の取り組みを考える機会を得た。 「学年・学級経営」や各学級の週の指導計画等の全教員への配付や、保育情報交換会等で、全学級の保育の経過や各担任の保育の意図を共有するとともに、学年・学級の枠を越えて教員間で幼児支援や指導が行えるよう協力体制をとった。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 本園の「うれしのタイム」の伝統や意義をふまえ、幼児の育ちを支える「うれしのタイム」のあり方と、学級・学年の活動や行事等との関連について捉え直す必要がある。 三年間の教育課程をもつ幼稚園として、毎年教育課程を見直ししながら三年間の幼児の育ちを見通した保育が行えるよう、各教員間の保育観や子ども観の共有に向けての取り組みが望まれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育研究活動についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策も適切である。 3年間の教育課程が的確に作成されており、各学年の育ち、年齢差がよく見える。今後、「うれしのタイム」の教材研究の内容をさらに充実させてほしい。
教育研究活動	<p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> 幼児一人一人の特性に応じた指導ができるよう教員同士及びカウンセラーによるアドバイス等を日々の保育情報交換会や教員会議等で共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初は前担任等より、幼児一人一人の特性や課題等についての引き継ぎを行い、幼児理解や援助の在り方に役立てるとともに、今後の見通しを立てている。日々の情報交換会の中で、全教員が情報を共有することで、一貫した教育が行えるようにした。 キンダーガーテンカウンセラーに、週1回定期的に来園してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受たり、保護者の相談へとつないだりすることで、より適切な指導が行えるように努めた。キンダーガーテンカウンセラーから受けた指導方法や個々の幼児の実態把握等を、全教員で共通理解し日々の保育活動に役立てていった。 必要に応じて個別の支援計画、指導計画を作成し、学期末に振り返りを行うなど、指導の充実を図った。 就学に向けて、幼小が連携し情報交換を行う機会をつくったり、日常の幼児の様子を附属小学校及び公立小学校から見に来てもらう機会を設けたりした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 個々の幼児に応じた指導を全教員が共通理解し、適切に行っていくるよう、さらに情報の共有、個に応じた指導の在り方についての共通理解を深めていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼児同士のトラブルの場面で、複数の教員が一人の幼児に同じようにかかわる姿が見られた。教員間で幼児に対する共通理解が図れているのがよくわかる。今後も継続してほしい。 中学校と高等学校への生徒の引継ぎは個人情報なので、細部までは教えられないと聞くが、幼稚園、小学校間は丁寧な引継ぎがなされている。今後も、必要な情報は伝え、その子にとってふさわしい教育が受けられるように働きかけてほしい。
教育研究活動	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 園内における「自然とともにある生活」を見直し、体験の深まりに視点をおいて、幼児の遊びや生活につながる保育の在り方を探る。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマ「保育におけるつながりを考えるー体験の深まりをめざしてー」に沿って、園内研修会を月2回の予定で行った。日々の幼児の姿や遊びの様子から体験の深まりをとらえたエピソードを記述したり、週の指導計画に研究テーマに関する保育の課題を挙げ、振り返りを行ったりしながら研究を進めた。そこから体験の深まりをめざすための「教師の援助」「環境の構成」、体験の深まりにおける「友達とのかかわり」をまとめた。 年4回、教員が互いの保育を見合う機会を設け、体験の深まりをめざすために必要な教師の援助や環境の構成等について考え合った。その際、大学教員と附属小中学校教員に案内を出し参加をしていただくことで、保育の質の向上や教員間の連携を図った。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「保育におけるつながりを考える」という研究テーマで4年間研究を深めた。その研究成果を踏まえて、来年度は新しい研究テーマに取り組みたい。 保育を見合う会やその事後研修については、今後も附属小学校等関係機関への案内を行い、様々な視野から保育や幼児を捉え、学びを深めていけるような機会にしていきたい。また、幼小の教員が連携して研究に取り組む合同研究についても前向きに取り組んでいきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 保育を見合う会を4回実施されている。今後も教員の良さを見つける「見合う会」を実施してほしい。 幼小の連携もさらに深めてほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
教育研究活動	<ul style="list-style-type: none"> ○子育て支援事業の充実 ・保護者の保育力を高める「親育てプログラム」を実施し、より効果的な子育て支援事業を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「親育てプログラム」として、「子育てひろば」のスタッフ、「誕生会」「親子活動」「弁当参加」「ここにこ子育て講座」を実施し、それらの活動を通じた保育参加、保育参観を行った。 ・「子育てひろば」のスタッフとして参加の保護者には、事前の打ち合わせ、事後の反省会を設け、幼児へのかかわり方を確認し合ったり、成長を伝え合ったりする場とした。「子育てひろば」後に毎回「だあいすき」を発行し、在園児の全保護者や未就園児保護者へ情報を発信した。 ・「誕生会」「弁当参加」では、園長・副園長を交えた懇話会や担任と話す場を設け、子育てを考える機会となるようにした。 ・「保育参加」として、各学年で親子活動の機会を設け、親子が触れ合ったり共に活動をしたりする場とした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「子育てひろば」のスタッフとして参加する保護者は、クラス単位での活動では多くいるが、それ以外の日は少なく固定化する傾向にあるので、活動する内容や幼児へのかかわり方とともに、保護者参加の必要性についても丁寧に伝え、より積極的な参加を促していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「きっすくらぶ」に参加すると楽しいのだが、参加希望者減少理由の一つに、事前、事後の反省会への参加が面倒な人もいるのではないかと検討が必要である。
地域への貢献	<ul style="list-style-type: none"> ○開かれた幼稚園づくり ・地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年10回実施し、地域、幼稚園、家庭がともに育つ活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・未就園児親子参加の「子育てひろば」を、年10回実施した。年間の参加登録者数は96組であった。午前中に実施し、前半は「うれしのタイム（在園児や「きっすくらぶ」の保護者が遊んでいる場）」に参加、後半は遊戯室で園長による「子育てワンポイント講座」と副園長による「触れ合い遊び」を行う日と、各クラス単位で在園児や保護者と共に活動する日を設けた。 ・「すこやか子育て相談」として、未就園児保護者が園長、副園長に気軽に子育てについて相談できる場を、随時設けた。 ・「子育てひろば」の内容を幼稚園ホームページに掲載したり、加東市社会福祉協議会に「子育てひろば」や地域の未就園児が参加できる行事を知らせたりした。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園ホームページに、具体的な情報を掲載するなど内容を充実させ、地域に向けてより丁寧な情報の発信をしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域への貢献についての自己評価結果は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・「子育てひろば」の参加については、ホームページの活用と保護者同士の伝達の力を利用する方法も検討してほしい。 ・生活発表会のケーブルTVを見て、地域の人は他の保育所等と比較して、見た目で判断する人も多いため、附属幼稚園ならではの取り組み（子どもと共に作る過程を大切にしているなど）をホームページ等でPRしてほしい。
他校種（小、中、高校、大学）との連携	<ul style="list-style-type: none"> ○校種間連携 ・近隣の高校も含めた他校種との交流は、ねらいを再認識し、活動を見直す中で互恵性のある連携活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三附属連携推進協議会において、各校園間で連携の重要性を確認し合い、計画的に交流活動などを進め、その都度方法や方向性を検討していった。 ・附属小学校との交流では、5歳児が、5年生と11月に1年生と2月に給食交流を実施した。7月には、5歳児が1年生の英語の授業参観、11月には1年生の生活科の授業に参加した。7月の幼稚園宿泊保育には、小学校教員が多数、夕食とキャンプファイヤー時に来園し、キャンプファイヤーのスタンプをもらうなど、園児との積極的な交流を行った。 ・附属中学校とは、4、5歳児と3年生が交流活動を行った。7月に中学生とペアの園児が遊び、9月には中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参し一緒に遊んだ。10月には、中学生の合唱の練習を5歳児が見学した。事前に打ち合わせを行い、ねらいを明確にする、園児の生活の流れに合わせて交流時期や活動を選ぶなど、互恵性のある交流を重ねた。 ・兵庫県立社高校1年生が「ふれあい育児体験」として全園児と一緒に遊んだり弁当を食べたりした。また、体育科による「行進」を全園児や希望保護者にも見る機会を設け近隣校との交流を積極的に行った。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・互恵性のある連携・交流を今後も続けたい。そのためにも、附属校園の教員間での授業参観をさらに増やしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他校種との連携についての自己評価は妥当であり、改善の方策も適切である。 ・よく取り組んでいる。今後も互恵性のある連携を継続してほしい。

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
他校種（小、中、高校、大学）との連携	<p>○実地教育(教育実習)</p> <ul style="list-style-type: none"> 新教育課程としての初等基礎実習が効果的な実習となるよう努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習が始まるまでに、少しでも園や子どもとかかわり課題意識をもって実習に望めるように、初等基礎実習のオリエンテーションを4月と実習が始まる直前に行い、園に来て保育に触れる機会を提供した。 幼稚園教育実習テキストの改訂を行った。課題意識をもって取り組めるように、指導案などをパソコンを使って作成することで、教材研究、保育研究、幼児理解の時間を確保できるように準備をすすめている。 学校サポート体験学習では、各行事ごとに事前のオリエンテーションを行い、各行事の目的や自分の役割を理解し、課題意識をもって参加できるように配慮した。また担当教員とも話し合う時間を作り、積極的に学べるような機会をつくった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 大学教員とも連携し、学生に事前に学んでおいてほしいことを吟味し、指導講話の中でも伝え、効果的に実習ができるようにしたい。 学校サポート体験学習の機会を活用し、実習前後にも継続して現場での実習ができることを今後も伝えていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 改訂されたテキストを活かして今後も効果的な実習指導に期待する。
	<p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 3、4歳児の親子活動（各年1回）、4、5歳児の陶芸活動（各年2回）を専門の大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子の触れ合いの機会となった。陶芸活動は大学キャンパスでの実施が継続されており、陶芸用粘土を使った作品作り、窯入れ、窯出しなど、本格的な陶芸体験ができた。大学に行く機会を生かし、大学構内の散策や園長の授業参観などを行ってきた。 PTAとの共催で年3回実施した「にこにこ子育て講座」で、大学教員による講義やピアノ演奏を聴く機会を得た。 大学幼年教育コース教員には、幼年教育研究会のコーディネーターや指導助言者として参加の他、園内研修会への参加を依頼し、指導助言等を受け、保育の資質向上に役立てた。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 協力教員と園とのスケジュールが合わせにくいこともあったので、連携が効果的に行われるよう、可能な範囲で早めに連絡を取り合いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学教員に依頼するためには、授業のない日に早めに予定を入れるなどの工夫をし、継続してほしい。